（別紙様式）

令和５年度　ICT活用実践研究　実績報告書

所属校園	附属釧路義務教育学校　後期課程	形態	■ 個人　□ 団体・ｸﾞﾙｰﾌﾟ

	氏　　名	職名	備考（分担等）
研究代表者 （申請者）	澤　田　康　介	教諭	
研究分担者 （団体・ｸﾞﾙｰﾌﾟの場合）			
研究題目	社会科×〇〇によるCreativeな学びの実現－絵画を活用した授業実践を通して－		

経　費　支　出　内　訳　*（事務の確認を経て提出のこと）*

事項	単価［円］	員数	金額［円］ （消費税込）	備考 （内訳・特記事項等）
三脚	4,345	1	4,345	不足分は教員研究費から支出した。
外付けSSD	25,080	1	25,080	
EarPod	3,003	1	3,003	
		合計	32,428	配分額　30,000円

【研究実績の概要，得られた成果・効果等】 *←以下に自由記載（報告書全体で４ページ程度に）*

（１）子供たちにとって暗記の印象が強い文化の学習

生徒が文化の学習にどんな印象をもっていのか確かめるために，「文化の学習にどのようなイメージをもっていますか?」と第 8 学年（中学２年）の生徒７０人にインタビューを行ったところ以下のような結果となった。

・暗記の印象をもつ回答（７０人中５０人） **「覚えることがたくさんある」「暗記することが多くてつまらない」「どの時代にも文化があるのはわかるが，違いがよくわからない」など，否定的な回答が多かった** **・関心を抱いている回答（７０人中２０人）** **「文化を学習することで，その時代の特徴がわかる」「その時代の人たちがどんなことを考えていたのかが文化とつながっていて面白い」と，歴史的背景に着目して回答する生徒もいた**

こうした生徒の回答を踏まえると，個々に作品や作者に焦点を当てていくと個別的知識の羅列に留まってしまうが，作品などを通して文化の共通点を見いだしていくことで暗記からの脱却へつながるのではないかと考えた。「暗記教科」などのイメージから社会科嫌いが少なくないが，文化の学習では豊富な資料，しかも絵画や作品などの写真が多いため，苦手意識のある生徒を巻き込んでいく可能性を多分に秘めていると言える。

（２）授業の手立て

本実践は次のような手立てを講じることで展開することとした。

① 海外の同時期の作品を取り上げることで，子供たちの「あれ？」を生む **② 絵画を仲間分けする活動を位置付けることで，共通点を引き出す**

一点目は，海外の同時期の作品を取り上げたことである。本時では，ルノワールとモネの作品を明治時代の日本の画家の作品とともに提示した。同時期の海外の作品を取り上げることにより，日本が西洋の影響を受けていたことに気づくきっかけになると考えた。二点目は，絵画を仲間分けする活動を位置付けたことである。明治時代の文化を見出していく上で，個別に作品を見ていくと印象の違いはわかるものの，一般化していく際の視点がぼやけてしまうと考えた。特に，文化の学習においてこれまでの時代との共通点や相違点に着目することがその時代の特色を把握するための重要な要素であると考える。こうした理由から，グループごとに絵画を仲間分けする時間を設けることで，文化の特色に迫ることができるようにした。

（３）授業の実際

本実践では中学二年「明治の文化」の実践を紹介する。

①導入 絵画を比較することで問いを生む

授業の導入では，二枚の絵画を比較する活動から始めた。一枚は横山大観が描いた「無我」，もう一枚はルノワールが描いた「イレーヌ・カーン・ダンヴェール嬢」である。その後，黒田清輝が描いた「読書」を題名と作者を伏せて提示した。以下に導入場面での実際のやりとりを示す。（T 教員，C 生徒）

T 日本人が描いたのはどっちだろう? S 絶対左!(「無我」) T 同じように左だと思った人? S (生徒全員が挙手) T どうしてそう思ったの? S 日本人が描かれているし・・・ S 和という感じがする。

T では，この作品(「読書」)は日本人と外国人，どちらが描いたでしょう?
S 絵のタッチが外国人のような気がする・・・
S リアルな感じがさっきの外国人が描いた絵と似ているよ。
S でも，モデルにしている人は日本人じゃない?
T この絵は日本人が描いたものです。
S えっ?
T どうして「えっ?」と思ったの?
S 初めの作品と印象が全然違うから，おかしいなと思って・・・。
T 日本人が描いた二つの作品はどちらも明治時代の作品です。今日は明治時代の文化の特徴について，絵画をもとにさぐっていきましょう。

横山大観とルノワールの作品を提示し，「日本人が描いたのはどちらだろう?」と問うと，生徒たちは迷わず横山大観の作品を選ぶ。その上で，次は黒田清輝が描いた「読書」を提示し，「この作品は日本人と外国人，どちらが描いたものだとう?」と問うた。黒田清輝はパリで印象派的な視覚を学んだため，生徒は迷いながら選択をする。「読書」は黒田清輝が描いたものだと確認すると，生徒から「えっ?!」という声が出たため，その声をもとに「明治時代の文化にはどのような特徴があるのか?」という本時の問いへつなげた。

②展開場面 絵画の仲間分けを通して特徴を探る

展開場面では，新たに五枚の絵画を提示した。提示した作品は①高橋由一が描いた「鮭」，②黒田清輝が描いた「湖畔」，③クロード・モネが描いた「睡蓮」，④青木繁が描いた「海の幸」，⑤山本芳翠が描いた「浦島図」である。これらの絵画をもとに，「次のうち，日本人が描いた作品はどれだろう?」と問うた。

一人一台の端末を用いて，生徒一人一人がじっくり絵画の特徴を追究する時間を確保した。その上で，グループワークを通して根拠をもたせて日本人画家の作品を選べるようにした。グループワーク後の全体交流では，「洋風な絵も，この時代に描かれていたことが，授業の初めに見た「無我」や「読書」からもわかるので・・・」など，導入で提示した「読書」の表現をもとに日本人画家の作品を追究する姿が見られた。

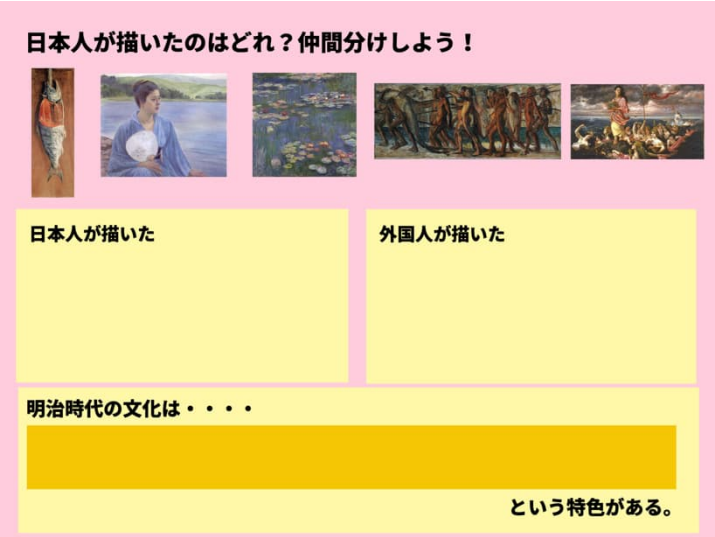

図１　一人一台端末に配布した資料

図２　一人一台端末で仲間わけをする生徒の様子

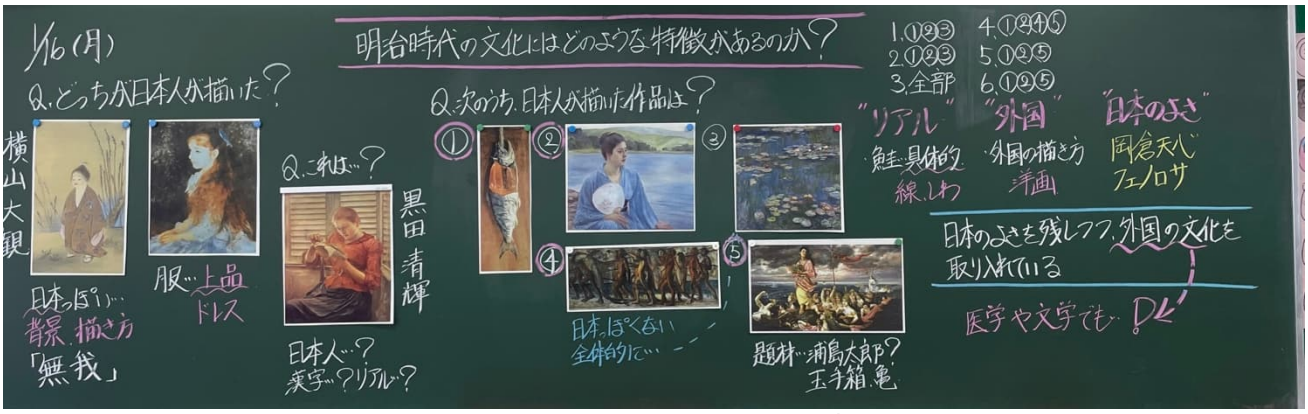

図３　絵画を用いた授業の板書

（４）生徒の振り返りから考える本実践の意義

本時の学習を通して，生徒には次のような記述が見られた。

【「西洋の文化」を踏まえた記述(１３人)】
生徒Ａ　他の国の絵画に影響されている。今までのものとは色使いなど全く違う。
生徒Ｂ　海外の絵の雰囲気を真似している。
生徒Ｃ　西洋の文化が大きく影響している。
生徒Ｄ　海外の絵に似ている。外国にありそうものが書かれている

【「西洋の文化」と「日本らしさ」を踏まえた記述(１１人)】
生徒Ｅ　伝統的な和風の感じを残しながら，西洋的な文化を取り入れた絵画。
生徒Ｆ　日本独自の文化を残しつつ，西洋を取り入れている絵が多い。
生徒Ｇ　明治時代の絵の特色は，日本の伝統的な書き方の絵と西洋風の書き方の絵が混ざっているように感じた。
生徒Ｈ　伝統的なものから，西洋のものまで多種多様である。

記述を見ると，大きく分けて二通りの記述が見られた。１つは，「西洋の文化」の視点を踏まえた記述であり，もう１つは「西洋の文化」に加えて「日本らしさ」を踏まえている記述である。対象学級である２４人中，１３人が「西洋の文化」を踏まえて記述しており，１１人が「西洋の文化」と「日本らしさ」を踏まえて記述していた。そのため，多くの生徒が明治時代の特色とも言える「西洋の文化」の視点を踏まえた記述ができていたと考えられる。こうした生徒の記述を見ていくと，絵画に焦点を当て，明治時代の文化の特色を見いだすことは，文化を学習する上での鍵になりそうだと考えた。
本時を終えたあとに，生徒にインタビューしたところ「文化というと，覚えるイメージが強かったけど，今日は覚えることはもちろんだけれど，たくさんの絵画を見て特色を学ぶことができて楽しかった。」，「はじめは絵と文化にどんなつながりがあるのか分からなかったけれど，授業を受けていくうちに絵を見ることで明治時代と西洋の文化がつながっていることがわかった」と話す姿が見られた。「覚えることが多い」「暗記」といったイメージのある文化の学習について，絵画をテーマに学ぶことで，文化=暗記のイメージを脱却するきっかけにつながっていくのではないかと考える。

（５）終わりに

“社会科ってこんな学習もするんですね！”絵画を取り上げた学習をした際，社会科嫌いの生徒が授業後にふと話しかけてきた言葉である。今回の実践を通して感じたのは「温故知新」である。予測不可能な社会を生き抜く力を育むことが求められるからこそ，授業を創る上で教師の創造性が大切になるであろう。社会科においても，これまでの優れた実践や考え方をもとにしながら，新たな視点を取り入れてくことがその一助になると考える。「固定概念に捉われず，「子供にとってどうなのか」を大切にしながら，よりよい社会科授業づくりを進めていきたい。